

美濃金山城から 天下統一を探る

美濃金山城跡は、織豊系城郭としての特徴を残していることから、平成25年10月に国史跡に指定されました。今回の企画展では、清須城、小牧山城、岐阜城など、信長ゆかりの城の出土資料等を展示し、織豊系城郭の特徴を紹介します。また、美濃金山城跡の構造を説明します。



織豊系城郭とは、織田信長、豊臣秀吉が活躍した時代に築かれた城のうち、「建物礎石（天守を含む）、石垣、瓦」の3点が揃っている城郭のこと。
※詳しくは、広報かに2013（平成25年）8月1日号をご覧ください。ホームページでもご覧いただけます。

「建物礎石、石垣、瓦」の3点が揃っている美濃金山城跡



本丸の建物礎石



二の丸西面石垣



出土した瓦

織田信長の居城と美濃金山城



信長の城づくりと天下統一

全国に築かれた城は3万とも4万ともいわれています。その多くは戦国期や織豊期とよばれる時期に築かれた城です。その期間、急速に築城技術が発達します。戦乱が激しくなるにつれ、武器の充実に伴い戦い方が変化し、城郭は軍事施設として強化されてさまざまな「仕掛け」が設けられます。

その城郭の歴史のなかで大きな「転換」をもたらしたのが織田信長です。信長は軍事性だけではなく「見せることを意識した城造りを行います。高石垣の存在が築城技術の高さを誇り、また金箔瓦の存在が資金力・経済力の高さを物語ります。また、初めて信長が「天主（守）」を作ったと言われていますが「下から「天主（守）」を仰がせる意図もあつたのでしょう。

近年、各地の城の発掘調査が進み、戦国時代から織豊期にかけての歴史像が大きく塗り替えられようとしています。

今回の企画展では、信長の城（清須・小牧山・岐阜）の変遷と美濃金山城との比較をしながら、信長の登場で戦国時代の城がどのように変化したのかを紹介します。

美濃金山城のつくりとその役割

戦国時代に誕生した美濃金山城（当初は烏峰城）は、東濃地方の中心的山城として機能していました。また、近年の発

3 岐阜城



来客をもてなした居館の復元 CG（岐阜市教育委員会提供）

信長が、天下統一の足がかりとした城。山頂の城郭と山麓の居館で構成され、巨石積みや客をもてなした庭園付きの館が発掘調査で確認されました。その建物が金箔瓦を用いた瓦葺き建物であったことも特筆すべき調査成果です。

2 小牧山城



発掘された本丸下の石垣（小牧市教育委員会提供）

信長が、美濃攻略の足がかりとした城。計画的に城下町を形成したり、主郭の周囲に巨石を積むなど、岐阜城、安土城へ続く信長の城づくりの原点の城といえます。近年の発掘調査では、山麓から中腹までの直線的な大手道の存在が確認されました。

1 清須城



出土した美濃で焼かれた陶器（愛知県埋蔵文化財センター提供）

信長が、尾張の統一の拠点とした城。尾張統一後、小牧へ移った後も清須の町は繁栄を維持していました。信長の次男信雄が清須に入城し、城と城下町の整備を行いました。城下町遺跡からは、全国各地で焼かれた陶器が出土しました。

掘調査により、建物礎石、石垣、瓦という遺構・遺物が確認され、織豊系城郭の特徴をとらえていることが注目されています。

また、美濃金山城の歴史的な役割としては、信長が天下統一を目指し、西へ西へと勢力を拡大するにあたり、東の守りを固める意味があつたと考えられています。武田氏が支配していた信濃（現在の長野県）へのけん制、攻略の中継として

重要な位置づけを持っていました。それゆえ、信長の城と同様に織豊系城郭の特徴を残していると考えられます。

また、中山道と木曽川の両方を監視できるような場所にあり、軍事的な側面だけでなく、交通・流通を掌握する経済的にも重要な城だつたと考えられます。当時は、兼山湊や木曽川を行き来する人々に城が見え、その力を見せつけていたのではなかつたでしょうか。

平成26年 7月17日(木)～10月13日(祝)

可児郷土歴史館

久々利 1644-1 ☎ 0211

休館日 月曜日および祝日の翌日
※7月15日、16日は展示準備のため臨時休館します

開館時間 午前9時～午後4時30分

入館料 一般200円
(団体150円 20人以上)
高校生以下は無料